



沖縄子どもの未来県民会議 地域円卓会議

子どもたちの体験活動の機会を確保するために
民間でできる支援とは？

実施報告書

日 時： 2020 年 1 月 25 日（土）13:30-16:00
場 所： 沖縄産業支援センター 大ホール 101（沖縄県那覇市字小禄 1831 番地 1）
主 催： 沖縄県、沖縄子どもの未来県民会議
協 力： 公益財団法人みらいファンド沖縄、NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
NPO 法人まちなか研究所わくわく
公益財団法人みらいファンド沖縄

ACTIVITY REPORT

【報告】沖縄子どもの未来県民会議地域円卓会議



■日 時：2020年1月25日（土）13:30-16:00
■場 所：沖縄産業支援センター 大ホール 101
■着席者数：7名（論点提供者、司会、記録者含む）
■来場者数：32名（教育機関、企業、行政等）

■主 催：沖縄県、沖縄子どもの未来県民会議
■協 力：公益財団法人みらいファンド沖縄
NPO 法人まちなか研究所わくわく
■お問合せ：NPO 法人まちなか研究所わくわく

論点提供 翁長 有希 氏（一般社団法人 沖縄キャリア教育支援企業ネットワーク 理事）

子どもたちの体験活動の機会を確保するために民間でできる支援とは？

沖縄県で実施した平成27年度「子どもの貧困実態調査」において、29.9%の子どもが貧困状態に置かれていることが明らかとなりました。沖縄県では、子どもの貧困解消に向け「子供の居場所」の設置を推進するとともに様々な施策を実施しており、また、行政だけでなく企業やあらゆる団体からの食料品の寄贈なども増えています。一方で、子どもの貧困は衣食住だけではなく、芸術鑑賞やイベントへの参加、キャリア教育など、子どもの成長過程における「体験活動」の機会にも格差が生じています。

今回の円卓会議では、子どもの体験活動を支援する関係者の方々の報告を踏まえ、体験活動が不足することで子どもにどのような影響を与えるのか、社会が子どもたちの体験活動の機会を確保するためにできることは何か、県民の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

センターメンバー



翁長 有希
一般社団法人
沖縄キャリア教育支援
企業ネットワーク
理事



今木 ともこ
NPO 法人 沖縄青少年
自立援助センター
ちゅらゆい
アシタネプロジェクト
顧問



比嘉 利作
KPG HOTEL & RESORT
コーポレートオフィス
人材開発
インターナショナル担当
副総支配人



與座 盛光
沖縄県立
糸満青少年の家
所長



南 信乃介
那覇市繁多川公民館
館長

➤ 円卓会議に参加いただいた皆さまから

事実の提供

- 経済産業省が行う「未来の教室」の中の提言において、今まで行われていた国語や算数などの「知る」という勉強は半分のみで、残り半分は、探求やプロジェクト型学習として課題の解決策に取り組む学習になっている。そして、教育の中心に「一人ひとりの「ワクワク」」が記載されている
- 「自分が何にワクワクするか」を探求・研究していきながら、その研究の中で必要な「知識」を、いかに個別最適化して学べるか、という教育に変わっていくと言われている
- 子ども達が自ら、知りたいと思ったことを外に出て体験していくことが、これからの教育の中心になっていく
- 不登校のため学校で体験できることも体験できていない、また、家庭の経済的な問題もあり、体験の機会を長く奪われている子どもがいる。そのような子どもは居場所に来ることもできないし、やりたいことも言えない
- どんなステキなシステムができて、漏れてしまう子が絶対でくるため、一人一人に合わせた支援をするしかない。その為、kukulu では個別最適化のような支援を行っている
- kukulu に通って元気になった子ども達が、自分達で自分達の声を伝えたいとの希望でラジオを始めた（アシタネプロジェクト）。1 つの事を始めると、ラジオのゲストの方にアポイントを取るためにビジネスメールを書かないといけなくなる。ビジネスメールを書いたことが無いという、新しい不安が出てくるが、その不安は、かつての彼ら、彼女らが持っていた「得体の知れない不安」ではなく、「分かっている不安」になる。その不安は解消すればいいだけになり、成長していくことができる
- アシタネプロジェクトでは不登校という共通点以外は、貧困の子や裕福な子、ヤンチャな子、引きこもりの子もいて異文化の環境であり、お互いに刺激合っている。同じ属性の子達で固まらないのが大事だと思う
- 沖縄子どもの未来県民会議の子ども未来ジョイントプロジェクト助成事業を活用し、KPG HOTEL & RESORT（以下、KPG）では自主支援活動として、美さと児童園に通う高校1年生の男子1名と女子1名を体験学習として受け入れた。そして、その子たちから「疲れたがホテルで働くという意識が高まった。ホテルの職に就こうと思った」、「ホテルの方が優しく、楽しかった」との感想をもらった
- KPG では小・中学校からインターンシップの依頼が多くきている。私たちの一つ一つの言動や教え方で子ども達の将来に関わってくるとスタッフの意識改革につながった。人に教えることの責任感や喜びが生まれ、普段の業務へのモチベーションも向上している。今後も子ども達の受け入れを継続していきたい
- 沖縄県立糸満青少年の家のプログラム
 - ✓ 日米親子交流キャンプ（無料）：アメリカと沖縄の子ども達でキャンプを行っている。子ども達は言葉を理解できないけれど友達になっていく
 - ✓ わくわくセカンドスクール：小学5年生が沖縄水産高校や南部農林高校、南部工業高校で体験学習をする。そして、45%が実業高校への進学しようと思った
 - ✓ 無人島アグレッシブサバイバルキャンプ：イカダを作り、無人島に漕いでいき、テント張りやシュノーケル体験等を行う。協力して行う事が多く、10代の子も達が「仲間がいたからできた」と言っていた
- 社会教育は経験を交換し、相手の視点を知ること、自分の力にしていくことである
- 以前的那覇市繁多川は3世帯に1軒は豆腐屋さんの地域で、豆腐はソウルフードであった。子ども達がそれを誇りに思えるように、地域の方が大豆の種まきから豆腐づくりまで指導したり、なぜ豆腐づくりが盛んだったのかを探る学習を、小学校3年生の総合学習で半年かけて行っている。この学習プログラムによって、地域のネットワークづくりにもなっている

評価の提供

- 芸能やスポーツなど、沖縄の子ども達がやりたいことを見つけた時の能力や、体験を通した腑に落ちる経験・知識をベースにした時の力は凄く強いと思う
- 体験をすることによって子どもが変わる。しかし、家に帰ると大人が変わっていないから、大人がまた元に戻している
- 何かの活動をする時、引っぱっていく人もいれば、裏方が良い人もいるなど、色んな関わり方がある
- 色んな体験の種をまいて、それをきっかけに成長していくことと、体験の場にも行けない子たちをどうするかという両輪が必要だと思う

視点の提供

- 体験とは「本来であれば日常生活で経験できることを、仕組みとして切り取ったもの。例えば、乗馬体験やボランティアなど、そのような環境がない時に、あえてつくりプログラム化すること」であると思う
- 教育の成果が知識で測られない社会は、沖縄の県民性に合うと思う。その為、体験を中心とする教育改革はチャンスだと思う。しかし、子どものやりたいことを体験させるには、情報や生活の余裕、経済的な余裕が必要になる。その為、体験格差によって貧困がさらに悪化する可能性がある
- 主体性が少し出てきたところで、大人の方達がボールを投げしてくれると、キャッチしてくれる子がいる
- kukuluに通う子たちの話を聞くと「社会は冷たくて、厳しくて、楽しくなくて、しんどさしかない。ある日突然落とし穴に落ちた感覚があって、何の理由かも分からず、出られないだけなんだ」と言っている。そのような状態を、何らかの体験で「自分の生きていく道を変えられる」と自分に希望を持ってほしい
- 家庭の資源不足を、地域の大人の教育力で補うべきだと思う
- 普段、あたり前に過ごしている中で、仲間と一緒にする体験を歩いて行ける範囲で行えるかが重要だと思う
- 最初は誰にどこが響くかは分からないため、体験する機会とキッカケは沢山準備することが重要である
- 知らない人からいきなり行事等に誘われても参加しないため、体験活動等を通して知り合った大人が継続して関わり、自然に誘えるのがよい
- キャンプや豆腐づくりなどの体験プログラムとして切り取れる所だけを体験として切り取ってしまっているため、反対に狭めてしまっているのかなと思う。kukuluでの大人との関りは他では得られない経験・体験であり、体験として切り取ってしまったものを日常に戻していくことが良いのではない
- 子ども達に、どのような経験（体験）を一緒につくっていくのかを考えると、大人の関わり方が多様になっていくと思う
- 体験が無ければ子ども達はどうか、という考え方も持っている必要があるのではない
- 個別最適化の教育が終了した後に、職場の中で職員が持っているスキルや性格を会社がきちんと認めて、人事評価に反映し、最適な人事配置を行っていくことが大事だと思う
- 子どもが体験をしてきたら、親も寄り添い、体験してきたことを伸ばしていけば、持続可能な教育につながると思う。体験をして、「なぜできたのか？」とフィードバックをする大人が必要である
- 体験したことをつぶされていく環境もあるため、つぶされない環境を他人がつくっていく必要がある。学校に行けない、親にも頼れない、自分も信じられない子ども達が地域にいることを知って欲しい
- 様々な背景がある人達がチャレンジしようと思った時にチャレンジできるかどうか、また、うまくいくか分からないけど何度でもチャレンジしようと思えるように、寄り添う人がいることが重要だと思う
- 大人も体験が少ないため、子どもが体験しても潰されてしまい、悪循環ではないかと思う。大人も子どもと同じくらい体験する必要がある
- 自身の体験不足によって進学後や就職後のどこに影響がでるのか、どうにかやり過ごして子どもの頃に顕在化しなかった子ども達の方が、実は深刻だったりするかもしれない
- 子どもを社会の一員として、同じように社会に受け入れ、大人が子どもへの関わり方を増やすことで、自ずと体験が増えていくと感じる
- 子どもには社会に参画する権利があり、家庭の状況に左右されることや、自己責任化されることは、社会としてあってはいけない
- 企業として体験を受け入れたいが、情報が流通していないため、来てくれない。まずは民間でできることを広めていく土台をつくる必要がある
- 大人の用意する体験が、子ども達が大人になって社会をつくっていく時に繋がらない感じがする
- 本来、子どもは色々なことをやってみたくなる生き物で、好奇心を持つ能力がある。体験したことを自分の力にしていく力が、いつの間にか削がれていっているのではない

事例の提供

- 7年間、引きこもっていた子へのアプローチ例：家に訪問してゲームや漫画などの小さな種を見つけ、水をかけ育てることで居場所に来てくれるようになる。居場所に来て初めは一人で遊んでいるため、スタッフが徐々にコミュニケーションを取り、同じゲームが好きな子同士を一緒にして、少しずつ社会性を作っていく。そして、「あの子とこのゲームをしてみたい」というような希望が出てくる。その後、eスポーツを見にいき、選手として参加していくことで、eスポーツを運営するようになった。このような事を7年間かけて行った

➤ 今後のアプローチの方向性（提案）

- 1) 子どもが感じる「ワクワク」からくる探求が、自ら知識を蓄積し成長していくという教育のトレンドから見ていくと、民間にこそ子どもに対してワクワクを伴う体験が与えやすい。民間の体験プログラムと子どもとの接点を意識的に増やし、可視化していく必要がある。
- 2) 体験を増やしていくことの障害となるのは、子どもの貧困や困窮状態からくる不安である。そこで貧困に起因する体験の格差が生み出す影響を社会で共有しながら、その不安をとりのぞいていく必要がある。
- 3) 民間が、子どもたちが主体的に体験と探求を欲する状態を作り出すには、提供する側と（家族を含む）子どもたち、お互いの参画設計をしっかりとすることで、双方にもメリットのある持続可能なプログラム開発を行うべき。

■参加者によるサブセッション

子どもたちの体験活動の機会を確保するために 民間でできる支援とは？

(参加者記載の原文をそのまま記載している為、事実と異なることがあります。グループ毎に①、②・・・と記載)

- ① ・友達が出来たこと(遊びたい子と遊べない)
 - ・食べる物が無いので、、ガス、電気が止まったと言ってくる
 - ・那覇市、小学校数より多い子の居場所
 - ・親がすべきことなのに⇒親じゃない大人がいる。良いこと
- ② ・子ども小さい頃から、体験の機会の数に差はある
 - ・人間関係の数も体験につながる、比例するのでは？
 - ・今まであがってきた“体験”が主体的、複数人を巻き込んだアクティブなイメージのものに限定
- ③ ・機会(体験)を多く提供
 - ・機会(体験)から他者を敬える体験もできるのでは？
 - ・個別最適化で将来の職業づくり
 - ・学校との連携
- ④ 1.居場所づくり
 - ・親以外のだれかの存在
⇒ みんなで育てる
☆パンづくり、小さい子とのふれあい
変わるきっかけづくり

体験は活動ではなく教育
インプット大事！

2.コストの課題

3.信頼関係づくり

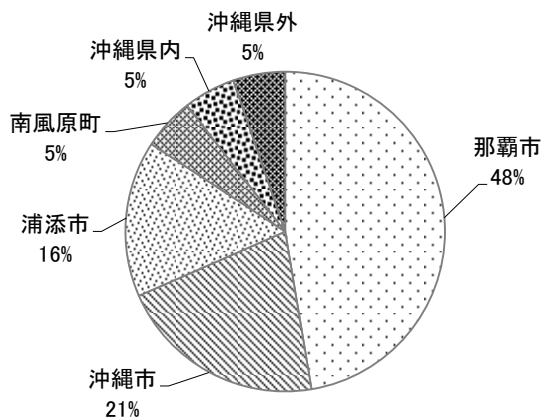
入口にたどりつくまでの支援
- ⑤ 好奇心のない所にプログラムはひびかない
 - ・引き出す場、機械
 - ・現実のモノ、しくみから
 - ・解体、再現はむいているのでは
- ⑥ ・大人の資質が上がらないといけない
 - ・子どもに関わる時間を少しでも持ってあげる
 - ・親子で体験学習(小学校)
 - ・親子でマップづくり(中学校)
 - ・子どもたちのコミュニティが強い。人間性を豊かに持てる環境
- ⑦ ・沖縄の地域性 子どもの貧困の課題
 - ・民間でできる事もっとある
 - ・仕事を体験する 求人
- ⑧ ・とらえ方がう
 - ・体験者の7割が貧困外 調査結果
 - ・20～30分のプログラムで良いので貧困対象に無料の体験プログラムを作ったほうがよい
 - ・ターゲットをどう広げるか(意識高い層は反応する)
 - ・離島の場合は顔を知っている。コミュニティなので参加しやすい

沖縄子どもの未来県民会議地域円卓会議 参加者アンケート集計

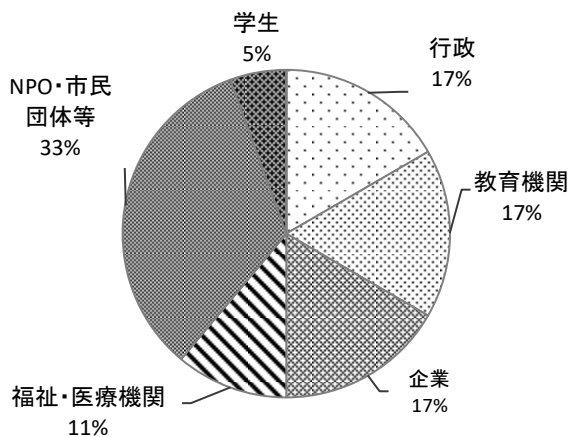
◆概要

- ・日時：2020年1月25日（土）13:30-16:00
- ・場所：沖縄産業支援センター 大ホール 101
- ・着席者：7名（論点提供者、司会、記録者含む）
- ・参加者：32名（アンケート回収19名、回収率59%）

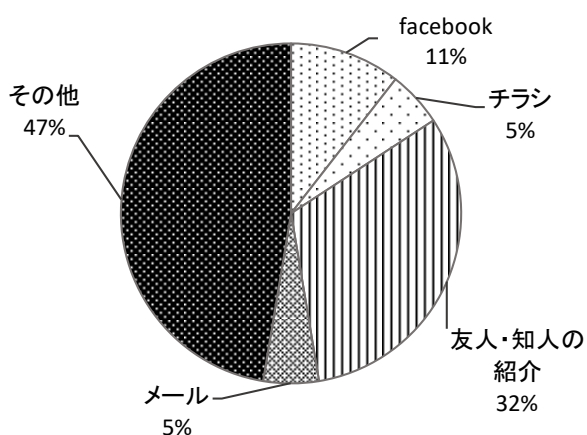
1. どちらから？



2. 所属



3. 円卓会議はどのように知ったか



4. 満足度

平均：4.6（5点中）

5.満足	4.概ね満足	3.普通	2.あまり満足していない	1.不満足
13名	5名	1名	0名	0名

5. 満足度の理由

（5. 満足）

- ・ 様々な分野で現場体験に基づく意見が聞けて興味深かった。
- ・ 当日の進め方を見ることができた。
- ・ いろいろな考え方があるのを知った。未来学習も興味が出た。
- ・ 多種多様なご意見があり勉強になりました。
- ・ 子供/体験/貧困。面白い切り口で未来（＝子供）を語れた。いろいろな意見が出た。（体験不足が潜在的、顕在的に子供（＝未来）に及ぼす影響を考えた。
- ・ 「体験」という切り口で色んな視点の議論がありとても考えさせられました
- ・ 抽象的な“体験”、“地域”というキーワードが、実際の生活、教育の中でとらえられてきているのかわからなかった。教育、居場所、子ども、貧困等少し曖昧になりがちなのが色々な視点から捉えられるようになっていたのが面白かった。
- ・ いろいろ議論でき学びになった。

（4. 概ね満足）

- ・ すばらしい話が聞けて良かった。
- ・ 民間でできることをもう少し具体的に議論していければよいと思った。
- ・ 多方面の方々の目線で体験活動についての意見を聞くことができてよかった。
- ・ 「地域」のひきこもり児童や支援団体の実態を知ることができました。
- ・ 会場セッションの時間がもう少しあればより良かったです。

(3. 普通)

- ・ 登壇者のターゲットとなる子どもの状態、年齢が広すぎて議論を深めるのに時間がかかっていた。
- ・ もっと企業側の登壇者がいてほしかった。

- ・ 変わった、成長した子どもたちをつぶれない、つぶさないようにしなければならない。

6. 円卓会議で印象に残ったこと

- ・ 企業としての社会貢献が今、流れになっている時期。子どもを育てる責任世代としての関わり方をもっと盛り上げていきたいと思った。プロボノなど・・・！
- ・ 体験活動が無ければどうなるか？という質問に対しての答えが本当必要なものであらうと感じました。
- ・ 子どもの体験を家庭に戻った時にリセットされる場合がある。親も体験が不足しているなら親の体験も必要という意見は印象的でした。
- ・ サブセッションは良いアイデアだと思う。
- ・ 色々な角度からテーマを見て考えることもあってはいいのかと思いました。
- ・ 体験というと子供（＝未来）の負の体験もあり、負の体験が未来に及ぼす影響もどこかで語れば。
- ・ 円卓会議形式で特にサブセッションで参加者も話ができたとよかったです。
- ・ 体験のタネまきとそこに行けない子は両輪であり、支援と協働が必要であること。
- ・ 子どもの社会参画の権利、とても良い発想だと思いました。子どもだから危ないことはさせない等、大人よりも未熟ということで良い体験、経験も制限されていることが多いと感じたので、より大人に近く、未成年のころから参画できる気運ができてくれば良いと思った。
- ・ 「体験」を子供から大人までその時々体験が必要なんでしょうね。
- ・ 一人一人のワクワクと普段の取組をどう結びつけるか。学校、地域でも実行できるか

(写真) 会場の様子



